

# 高等学校世界史における主題概念の変遷について

—学習指導要領における用語より—

A Study on the Changes of the Concept of ‘Subject’ in ‘World History’ in Senior High School  
—Focusing on the terms in “The Course of Study”—

上野 和久

UENO Kazuhisa

(和歌山大学教育学部附属教育実践総合センター特別研究員)

佐藤 史人

SATO Fumito

(和歌山大学教育学部)

## abstract

In “The Course of Study” revised in 1960, the term ‘subject’ was first used in “world history” when describing “fostering historical thinking ability”.

After that, the term ‘subject’ appeared more frequently in various expressions in “The Course of Study” every time when it was revised. Consequently, it became one of the features of “The Course of Study” for senior high school.

The aim of this study is to demonstrate the process in which the term ‘subject’ has been used, and (the part of) the role this term has been playing.

The result of this study shows that the term ‘subject’ has been used as something that brings out ‘students’ independence’ of their teachers in their learning, whereas it is observed that the term has been used in prospect of creating the scenes in which ‘teachers’ guidance’ dominates, by using causative expressions seen in some phrases, such as ‘have students consider’, ‘have students notice’ and ‘have students acquire skills’.

## 1 はじめに

戦前、中等学校における外国史教育は、西洋史と東洋史の2本立てで行われた。戦後にいわゆる「6・3・3・4制」の新学制（1947年）が行われるようになり、同時に新しい教科として社会科が成立した。学校教育における教科・科目、さらに言えば教育内容は占領軍の意向により、国家主義を排除し、民主主義教育を志向することになった<sup>(1)</sup>。このことの実現を最も期待されたのが新しく設定された社会科であったことは周知の通りである。しかしこの新設の社会科においても、西洋史・東洋史は高等学校社会科の選択科目として引き続き科目設定された。1948年10月、「新制高等学校教科課程の改正について」が発表され、国史（のち日本史と改称）が復活するとともに、外国に関する歴史である西洋史・東洋史は「世界史」に一本化される。

その後、学習指導要領は1952年（以下、学習指導要領は、指導要領〇〇年版と略記する）、に改訂される。さらにその後、学習指導要領は1956年の改訂を経て、1960年版の教科「世界史」において、「主題学習」という用語によって新たな記述内容が盛り込まれることとなった。

指導要領1960年版の科目「世界史B」の内容においては、「たとえばシルクロードと東西交渉、イギリスの

議会政治の発達、西部開拓と南北戦争、露土戦争と列強の世界政策、ワイマール体制とその崩壊などのような主題選び、政治的、経済的、社会的な観点から総合的に学習させる。それによって、歴史的思考力をいっそうつちかうことをあわせて考慮するものとする」と述べられている。この部分の記述に従ってみれば、「主題」とは「シルクロードと東西貿易」や「イギリスの議会政治の発達」などであり、いわゆる歴史的事実・事象の知識・情報ではなく、テーマを設定しつつ生徒が学習を進めることが企図されている。学習のテーマそのものを生徒自らが設定し、「歴史的思考力」の育成を目指すことを「主題学習」とし、初めて示されたものである。

ところで、歴史教育の在り方については諸説あり、現在でも論争が続いている。戸田善治の整理によれば、大きく2つに分けられるという<sup>(2)</sup>。これによれば、第一が「歴史がわかる」ということは「わかるべき歴史」の論理構造を教授者側があらかじめ設定し、その論理構造を学習者が把握することであるとされ、その完成形態の一つが中学校の指導要領58年版といわれている。第二は教授者が「歴史のわかり方」をあらかじめモデル化し、それに即して歴史的事象を把握することで学習者が「歴史がわかる」とする立場であるという。さらに有田嘉伸は、「歴史学習が歴史的思考よりも歴史的

知識を時代順に教えることが入学試験などの影響によって重視されている」<sup>(3)</sup>ことを指摘しており、社会科学教育の目的や内容とは直接関わりのない外的な影響を考慮する必要性もある。

上記の「主題」に関する研究は酒井原葉月の最近の研究<sup>(4)</sup>にみられるように、授業実践の分析による「主題」の適否や授業方法、あるいはその効果等を検証することが主な研究内容となっている。このことと関連して、原田智仁は「通史的系統学習を補完する内容構成論としてであり、問題解決的な学習論としてではなかった」<sup>(5)</sup>としており、歴史教育の在り方に重要な分析をしている。先の戸田の整理に見たように、カリキュラムないし教育内容論としての歴史教育の在り方によって再考すれば、現代の高等学校歴史教育における立場や見解を解明することは重要な課題のひとつであるといえよう。

さて、「主題」という用語はもちろん一般的に広く使用されるものであり、教育学の専門用語として特別なものではない。教育に関わる用語としても、高等学校指導要領2008年版の「芸術」などにも使用されており、汎用性が高い。しかしその一方で、これまでの社会科学の「主題」に見られるように、教科固有の意味内容や使われ方があり、教育方法や授業実践にさえも影響を及ぼす重要な役割を果たしていることがわかる。「主題」という用語は、世界史の学習指導要領改訂の度にさまざまな文章表現のもとに使用され、高等学校世界史学習指導要領の特徴の一部となっている。そこで、本研究では、高等学校歴史教育の在り方に関する研究の基礎研究として、1960年版から2009年版までの世界史B（1970年改訂、1978年改訂においては世界史）を考察対象とし、学習指導要領に表現される「主題」という用語の使用経緯を明らかにしながら、この用語が高等学校世界史学習指導要領に果たす意味や役割の一端を明らかにすることを試みた。

## 2 学習指導要領における主題の登場 (1960年版学習指導要領)

1960年版 第5章 世界史Bの目標において、初めて「主題」という用語が使用され、「歴史的思考力」の育成との関係が表現されている。

学習指導要領の本文中には、「歴史的思考力」は2カ所、「主題」は1カ所のみ使われている。

### 〔1 目標〕

「世界史の発展に関する基本的事項を系統的に理解させるとともに、現代社会の歴史的背景をはあくさせ、特に政治、経済、社会、文化などの関連について総合的に考察させることによって、歴史的思考力を深め、民主的な社会の発展に寄与する態度とそれに必要な能力を養う」

この「歴史的思考力を深める」ということと関連して、次の「2 内容」において、初めて「主題」という用語が使われている。

### 〔2 内容〕

「世界史Bは、世界史Aの場合よりも深めて取り扱うものとするが、その際たとえばシルクロードと東西交渉、イギリスの議会政治の発達、西部開拓と南北戦争、露土戦争と列強の世界政策、ワイマール体制とその崩壊などのような適当な主題を選び、政治的、経済的、社会的な観点から総合的に学習させる。それによって、歴史的思考力をいっそうつちかうことをあわせ考慮するものとする。」  
なお、以下に示す世界史Bの内容は、4単位を標準とし、全日制の課程にあっては、第2学年および第3学年、定時制の課程にあってはこれに相応する学年において履修させることを前提として作成したものである。」

〔2 内容〕において、「主題を選び」と表現し、主題の例示として5項目（アシルクロードと東西交渉、イイギリスの議会政治の発達、ウ西部開拓と南北戦争、エ露土戦争と列強の世界政策、オワイマール体制とその崩壊 等）が上げられている。また、これらの主題を3つの観点（政治的、経済的、社会的）総合的に学習することで、「歴史的思考力をいっそうつちかう」<sup>(6)</sup>と結びつけられている。

## 3 学習指導要領における「主題を設けて学習」 (1970年・1978年版学習指導要領)

### ①1970年版学習指導要領

1970年版は、従前の「世界史A」と「世界史B」が「世界史」としてまとめられた。

また、「主題」の用語については、「1 目標」における「歴史的思考力」とのつながりのもとに「3 内容の取扱い」において使われている。本文中には、「歴史的思考力」は2カ所（目標に1カ所、内容の取扱いに1カ所）、「主題」は7カ所（内容の取扱いに7カ所）に使われている。

### 〔1 目標〕

「(1)世界の歴史に関する基本的事項を理解させ、歴史的思考力をつちかい、世界の歴史の流れや現代世界の形成の歴史的過程を把握させて、国際社会に生きる日本人としての自覚を深め、民主的な国家・社会の発展に寄与する態度と能力を養う。」  
(後略)」

1960年版「1 目標」における「歴史的思考力」の用語は、「歴史的思考力を深め」という表現であったが、1970年版「1 目標」では、「歴史的思考力をつちかい」と表記された。

### 〔3 内容の取扱い〕

〔(前略)〕

(2)「世界史」の目標を達成し、生徒の歴史的思考

力をいっそう深めるため歴史的な流れの学習の中で、適切な主題を設けて指導することが望ましい。その際、次の諸点を考慮して取り扱う。

- ア 主題は、目標の達成、生徒の理解度、教材の効果などをよく吟味したうえで、たとえば、次のような観点などから選ぶことが考えられること。
- a 政治的、経済的、社会的、文化的、国際的な諸点から、多角的、総合的に学習できるもの
  - b 世界の歴史上の事象について、地域ごとの比較考察的な、あるいは地域相互の関連的な学習のできるもの
  - c 世界の歴史上の事象の発展を、時代別、地域別にある程度大きくまとめて学習できるもの
- イ 「世界史」を3単位で履修させる場合は最低1主題を、また、4単位以上で履修させる場合はそれぞれの単位数に応じて適切な数の主題を設けて学習させることが望ましいこと。
- ウ 二つ以上の主題を取り上げる場合の主題の配当については、観点の異なるものを取り上げ、また、特定の地域や時代にかたよらないように留意すること。
- (3)「世界史」に対する生徒の関心を高め、学習効果を上げ、地域や時代における社会と個人の関係を朋らかにするため、世界の歴史上の人物を適切に取り上げることが望ましい。また、主題として人物を取り上げ、人物とその時代的背景との関連などを考察させることも考えられる。

1960年版の「主題」は、「主題を選び」と使われ、前述の1970年版においては、「主題を設けて学習させる」と主題学習という表現で使われている。また、観点においても1960年版では「主題を選び、政治的、経済的、社会的な観点から総合的に学習させる」の視点も含み、1970年代は前述の「3 内容の取扱い」(2)において、3つの観点から「選ぶこと」が記述されている。

## ②1978年版学習指導要領

1978年版においても引き続き、世界史として統一された科目として継続された。

「主題」の用語については、1970年版と同じく「1目標」における「歴史的思考力」とのつながりのもとに「3 内容の取扱い」において使われている。本文中には、「歴史的思考力」は2カ所(目標に1カ所、内容の取扱いに1カ所)、「主題」は3カ所(内容の取扱いに3カ所)に使われている。その表記されている所を抜粋すると、

### 「1 目標」

「世界の歴史に関する基本的事項を理解させ、歴史的思考力を培うとともに、現代世界形成の歴史的

過程と世界の歴史における各文化圏の特色を把握させて、国際社会に生きる日本人としての資質を養う」

1970年版においては「歴史的思考力をつちかい」という表記が、1978年版では「歴史的思考力を培う」と漢字表記に変わっている。また、「3 内容の取扱い」においても1970年版に「歴史的思考力をいっそう深める」という表記が、1978年版では「歴史的思考力を一層深める」と同じく漢字表記に変わっている。

### 「3 内容の取扱い」

「(前略)

(2)生徒の歴史的思考力を一層深めるため、歴史的な流れの学習の中で、適切な主題を設けて学習させるよう配慮する。その際、次の諸点を考慮して取り扱うものとする。

- ア 主題は、生徒の関心や理解度、教材の効果などを吟味した上で、例えば、次のような観点などから選ぶこと。
- a 地域ごとの比較考察的又は地域相互の関連的な学習のできるもの
  - b 時代別、地域別又は国別に、ある程度大きくまとめて学習できるもの
  - c 現代の諸地域の社会と文化について、文化人類学などの成果を活用しながらできるもの
  - d 世界の歴史上の事象と日本の歴史上の事象とを、比較させたり、関連させたりするなどして、世界の歴史における我が国の位量について学習できるもの
  - e 世界の歴史上の人物について、時代的背景や地域の特質との関連などにおいて学習できるもの
- イ 主題の配当については、できるだけ観点の異なるものを取り上げ、また、特定の時代や地域に偏らないように留意すること。  
(後略)」

1970年版と同じく、1978年版では「主題を設けて学習する」という主題学習の表現がされている。また、1960年版から引き継がれた、1970年版における「主題」における観点である「政治的、経済的、社会的」という用語は、1978年版において無くなる。そして、1970年版の3つの観点から、前述の1978年は5つの観点から選ぶとの記述がなされる。

## 4 社会科の再編における学習指導要領の「主題を設けて学習」(1989年版学習指導要領)

この改訂において、社会科が再編成され高等学校社会科は地歴科と公民科に編成される。

世界史は地歴科において「世界史A」(2単位)と「世界史B」(4単位)となり、主題学習は「世界史B」に



引き継がれる。本文中には、「歴史的思考力」は1カ所（目標に1カ所）、「主題」は1カ所（内容の取扱いに1カ所）に使われている。その表記されている所を抜粋すると、

「1 目標」

「現代世界の形成の歴史的過程と世界の歴史における各文化圏の特色について理解させ、文化の多様性・複合性や相互交流を広い視野から考察させることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に生きる日本人としての自覚と資質を養う。」

1979年版の「(1)目標」と同じ「歴史的思考力を培い」という表記である。

「3 内容の取扱い」

「(前略)

イ 生徒の歴史的な思考力を培いかつ歴史に対し興味・関心をもたせるため、適切な主題を設けて学習できるようにすること。

エ 内容の(7)については、単に知識を与えるだけでなく、現代の世界が直面する課題について考察を加えさせること。その際、核兵器の脅威に着目させ、戦争を防止し、民主的で平和な国際社会を実現させることが重要な課題であることを認識させること。

(後略)」

「主題」という用語の使用について、1979年版の「(1)内容と取扱い」と同じ「主題を設けて学習できる」と記述されている。「主題」という用語はこの部分のみ1カ所使用されただけであるが、「主題を設けて学習できる」という主題学習のこととして表記している。

5 学年指導要録の「主題を設定して追求する学習」  
(1999年版・2009年版学習指導要領)

①1999年版学習指導要領

本文中には、「歴史的思考力」は「1 目標」に1カ所、「主題」は「2 内容」に2カ所、「3 内容の取扱い」に3カ所の5カ所に使われている。

「1 目標」

「世界の歴史の大きな枠組みと流れを、我が国の歴史と関連付けながら理解させ、文化の多様性と現代世界の特質を広い視野から考察させることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本人としての自覚と資質を養う。」

1970年版の「歴史的思考力をつちかい」という表現から、1978年版・1989年版の「歴史的思考力を培い」とこの表現が使われている。

「2 内容」

(1)世界史への扉

「身近なものや日常生活にかかわる主題、我が国の歴史にかかわる主題など、適切な主題を設定し追究する学習を通して、歴史に対する関心と世界史学習への意欲を高める。(後略)」

「3 内容の取扱い」

(2)内容の取扱いに当たっては、次の事項に配慮するものとする。

「ア 内容の(1)については、生徒の実態等に応じ、アからウまでのうち適宜項目を選択し、二つ程度主題を設定して追究する学習を行うこと。

エ 内容の(5)については、次の事項に留意すること。

(中略)

(イ)内容のエ、オ及び力については、例示された課題などを参考に適切な主題を設定し、生徒の主体的な追究を通して認識を深めさせるようにすること。」

本文中の、「2 内容」(1)「世界の扉」において、「主題」という用語が使用されている。これは、1960年度版以来のことであり、そこには、従前は「主題を設定し学習する」という表現がされていたが、今回は「主題を設定し追求する学習」という表現に変わっている。(「内容の取扱い」においても同表現がされている)

この「主題を設定し追求する学習」は、内容の大項目「(1)世界史の扉」の(ア)から(ウ)の項目において、「追及させ…気づかせる」という表現と、大項目「(5)地球世界の形成」の中項目(エ)から(カ)においては、「…追及させ…考察させる」、「展望させる」という用語が使用されていることから推測できる。

②2009年版学習指導要領

2013年(平成25年)から年次進行している新学習指導要領においては、本文中に「歴史的思考力」は「1 目標」と「3 内容の取扱い」に各1カ所の2カ所の記述がある。また、「主題」は「2 内容」に5カ所、「3 内容の取扱い」に5カ所の10カ所に使われている。

「1 目標」

「世界の歴史の大きな枠組みと展開を諸資料に基づき地理的条件や日本の歴史と関連付けながら理解させ、文化の多様性・複合性と現代世界の特質を広い視野から考察させることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う。」

1999年版の「歴史的思考力を培い」という表現は継承されている。

「2 内容」

「(1)世界史への扉

自然環境と人類のかかわり、日本の歴史と世

界の歴史のつながり、日常生活にみる世界の歴史にかかわる適切な主題を設定し考察する活動を通して、地理と歴史への関心を高め、世界史学習の意義に気付かせる。

(2)諸地域世界の形成

(中略)

エ 時間軸からみる諸地域世界

主題を設定し、それに関連する事項を年代順に並べたり、因果関係で結び付けたり、地域世界ごとに比較したりするなどの活動を通して、世界史を時間的なつながりに着目して整理し、表現する技能を習得させる。

(3)諸地域世界の交流と再編

(中略)

エ 空間軸からみる諸地域世界

同時代性に着目して主題を設定し、諸地域世界の接触や交流などを地図上に表したり、世紀ごとに比較したりするなどの活動を通して、世界史を空間的なつながりに着目して整理し、表現する技能を習得させる。

(4)諸地域世界の結合と変容

オ 資料からよみとく歴史の世界

主題を設定し、その時代の資料を選択して、資料の内容をまとめたり、その意図やねらいを推測したり、資料への疑問を提起したりするなどの活動を通して、資料を多面的・多角的に考察し、よみとく技能を習得させる。

(5)地球世界の到来

オ 資料を活用して探究する地球世界の課題  
地球世界の課題に関する適切な主題を設定させ、歴史的観点から資料を活用して探究し、その成果を論述したり討論したりするなどの活動を通して、資料を活用し表現する技能を習得させるとともに、これからの世界と日本の在り方や世界の人々が協調し共存できる持続可能な社会の実現について展望させる。

「2 内容」における「主題」に関する用語としての使い方は、1999年版のように「主題を設定し追求する」という表現がなくなり、2009年版は、主として「主題を設定し」、「主題を設定させ」という表現が使われている。そして、それぞれの文章の末尾に「技能を習得させる」という表現が記述されている。

「3 内容の取扱い」

「 (中略)

(3)主題を設定して行う学習については、次の事項に配慮するものとする。

ア 学習の実施に当たっては、適切な時間を確保し、年間指導計画の中に位置付けて段階的・継続的に指導すること。また、主題の設定や資料の選択に際しては、生徒の興味・関心

や学校、地域の実態等に十分配慮して行うこと。

イ 内容の(1)については、中学校社会科の内容との連続性に配慮して、主題を設定すること。その際、アについては、この科目の導入として位置付けること。イ及びウについては、適切な時期に実施するようにすること。

ウ 内容の(2)のエ、(3)のエ及び(4)のオについては、次の事項に留意すること。

(ア)それぞれの項目の内容に示された事項を参考にして主題を設定し、生徒の主体的な追求を通して、歴史的思考力を培うようにすること。

(イ)内容の(2)のエ及び(3)のエについては、年表や地図その他の資料を活用して説明するなどの活動を取り入れること。

(ウ)内容の(4)のオについては、文字資料に加えて、絵画、風刺画、写真などの図像資料を取り入れるよう工夫すること。

エ 内容の(5)のオについては、内容の(5)のアからエまでに示された事項を参考にして主題を設定させること。」

「3 内容の取扱い」においても、1999年版の「主題を設定し追求する」という表現がなくなり、2009年版は、主として「主題を設定し」、「主題を設定させ」という表現が使われている。「主題を設定し追求する」という表現は、2009年版では、「ウ」の(ア)で記述されている「主題を設定し、生徒の主体的な追求を通して、歴史的思考力を培う」という表現に変わったと考えられる。

「主題を設定し、生徒の主体的な追求を通して、歴史的思考力を培う」という表現は、「2 内容」における大項目(1)「世界史の扉」の(ア)から(ウ)の項目において、「…考察させ…気付かせる」という表現と、大項目(5)地球世界の形成の中項目(ア)から(エ)においては、「…理解させ…考察させる」、「展望させる」という表現がなっている。

## 6 用語としての「主題」使われ方の考察

1960年版ではじめて「主題」のという用語が登場し、「主題を選び」という使われ方をして、「歴史的思考力を深める」とことつながりながら使われた。主題の例示で「シルクロードと東西交渉」、「西部開拓と南北戦争」、「露土戦争と列強の世界政策」、「ワイマール体制とその崩壊」、「イギリスの議会政治の発達」ということから主題概念を推測するしかない。

1970年版と1978年版においては、「主題を設けて学習する」という使われ方をしている。これは、主題学習<sup>(7)</sup>と位置づけられる。1960年の「主題を選び」という使われ方とは違いがある。これは新明解国語辞典(三省堂)によると「選ぶ」は、「①条件を備える最も好ましいものとして幾かの中から選ぶ。②目的にかなう材料を集めて書物をつくる。(後略)」と記述されている。

また、同じく「設ける」は「①(前から用意して)その機会を作る。②何かを運営するために、組織・基準などを作る。」と記述されている。この違いは「主題」という用語が高等学校世界史の学習指導上でより重要な位置づけをされたように読み取れる。

1989年版においては、「主題」という用語は1カ所のみ使われているだけである。しかし、「主題を設けて学習する」という主題学習を堅持している。

1999年版になると、従前までの「主題を設けて学習する」という表現はなくなり、「主題を設定して追求する学習」という使われ方をしている。これは主題追求学習<sup>9)</sup>と言われる。「2 内容」の大項目の文面に「追及させ…気づかせる」「…追及させ…考察させる(展望させる)」という用語が使用されていることにも、特徴として把握できる。

2009年版は、「主題」という用語の使われ方を見ると、1999年版に見られる「主題を設定し追求する学習」という表現は無くなり、「主題を設定し」、「主題を設定させ」という表現が使われている。しかし、その表現は「主題を設定し、生徒の主体的な追求を通して、歴史的思考力を培う」という文章表現でつかわれているところから、「生徒の主体性」を重視しようとした主題追求学習とも読み取れる。それは、1999年版と同じく「2 内容」における大項目(1)「世界史の扉」の(ア)から(カ)の項目において、「…考察させ…気付かせる」という表現と、大項目「(5)地球世界の形成」の中項目(ア)から(カ)においては、「…理解させ…考察させる」、「展望させる」という表現がされているが、「2 内容」の大項目(2)のエ、(3)のエ、(4)のオ、(5)のオに記述されている「主題を設定し(設定させ) ……技能を習得させる」という記述は、学習場面において「生徒の主体性」と「技能の習得」という相矛盾する概念が機能することになる。

## 7 まとめと課題

1960年版から2009年版の高等学校学習指導要領「世界史B・世界史」を考察対象とし、学習指導要領に表現される「主題」という用語の使用経緯を考察した結果、主題概念について次のようにまとめることができる。

- ①「主題」という用語を、1960年版は、萌芽期であり、「主題を選ぶ」という学習指導要領全体の中の位置づけが明確でない表現である。「総合的な歴史解釈」やそのための「主題」という言葉を用いての説明は、歴史的思考力の育成というものへの基本的な視点を示すには不十分であり、その技術的・方法的な側面を示しているにすぎないと考えられる。
- ②1970年版、1978年版において「主題を設けて学習する」という意味での「主題」の使われ方は「主題学習」となった。その学習指導要領の「内容の取扱い」において位置付けられてきたことは、授業計画の中で任意に行うことができるということの意味しているところに、この時期の「主題学習」の特徴が伺える。

また、主題学習の目標が「歴史的思考力を一層(いっそう)培う、あるいは深める」とされたが、その「一層(いっそう)」という表現から、主題学習は補足的な学習とみなされていたと考えられる。

- ③1989年版では、社会科の再編のもと、主題という用語が1カ所しか記載されていない事実より、主題学習の明確な位置づけがなされなかった。これは、主題学習の新しい目標を提起し、内容を示唆する主題設定の新しい観点を提示しながらも方法については何もふれず、観点の提示の仕方は後退している。これは、主題学習に対する現場の関心が薄らいできているという想像と無関係でないと考えられる。

- ④1999年版、2009年版では、「主題を設定して追求する学習」(主題追求学習)として、学習を実施する項目(単元)が指定され、学習指導要領の「内容」でのべられている。これは、従前の「内容の取扱い」からの変化であり、「主題を設定し、追求する」学習に対する授業者の任意性は、狭められたと考えられる。他方、「生徒の主体的な追求を通して」という、従前の生徒の主体性を重要視する表現がされている。

この傾向は、2009年版の「主題を設定し…(省略)…技能を習得させる」という用語の使われ方においてみることができる。それは、生徒の主体的重視にブレーキをかけ、教師の適切な指導をいれるという「両面性」を意味している。

すなわち、「主題」という用語は、学習場面における「生徒の主体性」を引き出す場をつくるものとしてつかわれると同時に、他方「技能を習得させる」、「気付かせる」、「考察させる」という使役的表現とともに使われていることから、「指導教員の指導力」が優先し、「生徒の主体性」を無くす可能性をもつと考えられる。

以上のことから、学習指導要領の「歴史的思考力」を育て、客観的に批判する能力と態度を養うことから乖離する傾向がみられる。

- 今後の課題として、学習指導要領の比較だけでなく、改訂時の学習指導要領概説、教科書等の比較分析をも入れた「主題概念」の検討することがあげられる。

## 引用文献

- (1)柴田義松 「戦後「新教育」と学習指導要領(試案)の思想」『現代カリキュラム事典』ぎょうせい 2001年 p.206
- (2)「歴史教育」『現代カリキュラム事典』ぎょうせい 2001年 p.236
- (3)「主題学習」『社会科重要用語300の基礎知識』明治図書 2000年 p.219
- (4)酒井原葉月 「歴史の探究と主題学習」『山形大学大学院教育実践研究科年報』2012年
- (5)「主題学習」『社会科教育事典』2000年 pp.152-153
- (6)戸井田克己 「学習指導要領の変遷と歴史的思考力育成の課題」教育論叢、近畿大学、16(1)、pp.1-15 2004年
- (7)森 才三 「高等学校「世界史」の「主題を設定し追及する」学習(1)―「世界史」主題学習の変遷から」中等教育研究紀要、44 pp.111-116 2004年